令和６年度

のびのび通信

No.　5

令和７年３月２１日

秋田大学教育文化学部附属小学校「いじめ防止対策委員会」発行

子どもの様子を気にかけて

令和６年度の修了式を迎えました。よい思い出、苦しかった思い出、様々な思い出の積み重ねの上に、強く賢くなった１年間の成長があるものと思います。「うちの子は成長が感じられないなあ。」「通知表がよくないぞ。」等、親としてはいろいろ思うところがある時期でもあるかもしれませんが、子どもたちが次の学年に向けて前向きになれるような言葉を考えてあげたいですね。結果だけで見るのではなく、途中経過のがんばりを褒めたり、何か課題があるとすればその原因を一緒に考えたりすることも大切です。

春休みはゆっくりリラックスできたらよいのですが、学年が上がることに不安をもつ子や、クラス替えがある学年では期待と不安で落ち着かない子もいるでしょう。別れや出会いもあって心が穏やかでない春の時期、子どもの様子を穏やかに見守っていただきたいと思います。

◇子どもにいつもと違う様子はないでしょうか？

○からだの調子：食欲がない、体調が悪い（特に頭痛や腹痛など）
○表情や態度：表情がさえない、言葉数が少ない、おどおどしている、言葉遣いが荒い、人や物にあたる
○持ち物の様子：お小遣いが早くなくなる、与えていない物を持っている、スマホなどに敏感に反応する・逆に全く見なくなった、家のお金がなくなっている、服に不自然な汚れ、持ち物がよくなくなる
○就寝の様子：寝付きが悪そう、夜中に何度も目を覚ます、うなされている、いつもはしない歯ぎしりをするようになった、就寝時刻が遅くなる

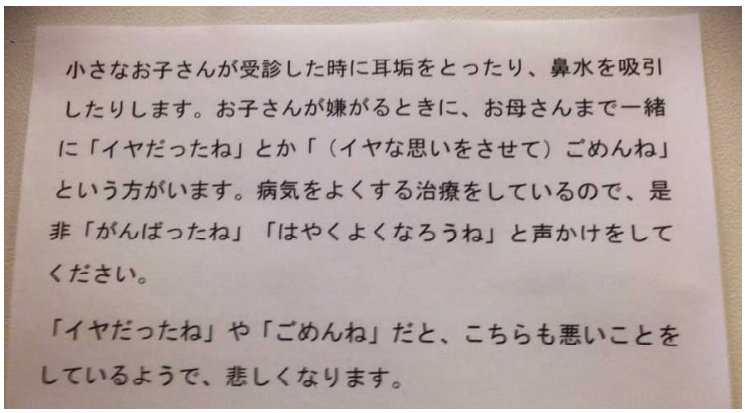
以上のようなことがあったら、子どもを問い詰めずに「あなたを大切に思っているよ」というメッセージが伝わるように話を聞いてください。

◇子どもが相談をしてきたら…

困ったときに人に相談することは勇気がいることです。その機会を逃さないように、安心して話せる場を作りましょう。

○子どもの思いを大切に：保護者が問題を急いで解決しようとするのではなく、子ども自身が解決できるよう、どのように解決したいのかを聞き、その思いを尊重してあげてください。
○落ち着いてあせらずに：子どもが安心できるように話を聞いてください。子どもの気持ちには「つらかったね」「不安だよね」など、共感する言葉を返し、子ども自身が自分の気持ちに気付くことを促します。
○保護者の気持ちに余裕をもって：ゆったりとした気持ちで話を聞くことが大切です。もし相手があることでしたら、うちの子の言葉だけではなく、相手の子の気持ちや状況を想像してみることも大切です。

「共感」の言葉のかけ方も大切では


小さなお子さんが受診した時に耳垢をとったり、鼻水を吸引したりします。お子さんが嫌がるときに、お母さんまで一緒に「イヤだったね」とか「（イヤな思いをさせて）ごめんね」という方がいます。病気をよくする治療をしているので、是非「がんばったね」「はやくよくなろうね」と声かけをしてください。

「イヤだったね」や「ごめんね」だと、こちらも悪いことをしているようで、悲しくなります。

ネット上からの引用写真

ネット上の投稿で見かけた、日本のどこかのクリニック内の掲示物。これを投稿した人も何かを思うところがあって投稿したのでしょう。保護者から子どもへの声かけについて考える機会となりました。

1ページ目にあるとおり、「子どもが安心できるように話を聞いてください。子どもの気持ちには『つらかったね』『不安だよね』など、共感する言葉を返し、子ども自身が自分の気持ちに気付くことを促します。」ということは大切だと思います。ただ、この「共感」が行き過ぎて、例えば子どもがいじわるをされた場合などに、相手の子を「悪い子だね」「むかつくね」「相手にしない方がいいよ」などと、相手を全否定してしまうような攻撃的な声かけはいかがなものか？と思うのです。「子どもの言うことを信じます」と言えば聞こえはいいのですが、今後の学校生活や人間関係づくりを考えても、うまく励ますような言葉かけも大切ではないかと思います。

子ども同士は些細なことでぶつかったり言い争いをしたりするもの。あくまで片一方である自分の子の言い分だけを聞いてすぐに相手を悪者扱いしてしまうのは「共感」を超えてしまうと思うのです。学校に寄せられるいじめの疑いや子どもの不安などの相談は、結局「友達とのお互いの問題」であることがほとんど。自分の子の言い分だけで決めつけるのではなく、学校で十分にお互いの言い分を聞き取れるように相談していただけたらと思います。

このクリニックの院長さんは、治療や医師・看護師を悪者にしたような言葉が悲しいのでしょう。保護者の声かけの仕方で、子どもの相手に対する見方や考え方に大きな影響を与えるのではないかと思います。クリニックの件と学校のいじめ問題とでは少し違うかもしれませんが、言葉一つで子どもの成長の方向が変わることもあるのではと考えました。

子どもたちの様子から

3月6日に行われた「ありがとう6年生集会」では、卒業生と在校生がお互いの気持ちを伝え合う活動の意味や内容、活動するときの気持ちのもち方や表し方を自分たちで考え、確かめ、実行することを通して、自主的・実践的な態度を育てることをねらいとして行われました。

特徴的なのは、在校生が心を込めて飾り付けをした手作りの帽子が卒業生にプレゼントされることです。感謝の思いを込めたこのプレゼントは、何年も続く本校の伝統的な取組です。贈る側にとっても贈られる側にとっても感動的な活動となりました。

卒業生からもサプライズが飛び出し、あたたかい雰囲気の集会となりました。

文責：生徒指導主事（石田）